

「小さな親切を習慣に」

校長 安藤 徹



6月というときみなさんはどんなイメージを持たれるでしょうか？

「6月と聞いて一番最初に思い浮かべるもの（こと）」について聞いたあるランキングによると1位「梅雨」2位「あじさい」3位「ジューンブライド」と続き、私が真っ先に思いついた「祝日がない」というのも5位に入っていました。

そんなわけでこの6月は祝日がなくて長い1か月となりそうですが、学校では6月中旬から2年生の実習期間が始まります。学校の外に出て初めて現場実習に挑む生徒もいますが、ぜひいろいろなことを経験し、働くことについてどんなことでもよいので自分の目や耳や身体で感じ取ってほしいと思っています。



ところで、毎年6月13日は「小さな親切の日」とよばれています。それは1963年のこの日に「小さな親切運動本部」という団体が発足したことに由来するといわれていますが、それより3か月前に当時の東京大学総長（学長）であった茅誠司（かやせいじ）さんという人が東京大学の卒業式で卒業生に『小さな親切』を勇気をもってやってほしい。小さな親切がやがて社会のすみずみまで埋めつくすであろう親切のなだれのようにしてほしい。」と述べ、さらに「学校で学んだ知識や教養をただ百科事典のようにたくわえておくだけでは立派な社会人にはなれない。これまで学んだ知識や教養を社会人としてのこれからの生活に生かしていくためには、やろうとすれば誰でもできる『小さな親切』を絶えず行っていくことが大切だ。」という内容の祝辞を贈ったことがきっかけとなり、茅さんとその言葉に感銘を受けた人々が加わり、卒業式の3カ月後の6月13日に団体が立ち上がり、「小さな親切運動」として今日まで引き継がれてきたものです。

そして、「小さな親切運動本部」が推奨する小さな運動8か条の中では「あいさつや返事をする」「ありがとう、どういたしましてと言う」「困っている人を助ける」「年配者や妊娠者に席をゆずる」など、社会の中で人がほかの人と生活していくための当たり前のルールや約束ごとが提唱されていますが、一番大切だと感じるのは「できることはまずやってみよう。そしてそれが習慣となるようにしよう」という考え方です。



例えば実習中には誰にでも気持ちよくあいさつや返事をするのができていた人も実習期間が終わると急にあいさつできなくなったり・・・そんなケースも小さな親切が習慣化できていないということになります。

小さな親切運動開始から約60年・・・時代は変わっても小さな親切の「小さな」という言葉の中には「いつでもどこでも誰でもちょっとした相手への思いやりや気配りがあればできる」という意味と小さな行動をこつこつ継続することでやがてそれが大きな社会の力となるということも伝えられてきたように思います。

これから真の意味で多様性の社会そして共生社会を築いていくために私たちに必要なことはまさしくこの「小さな親切」がいつでもどこでも誰にでもごく自然にできるようになることではないかと思います。そして誰とでも「こんにちは」「ありがとう」そんな言葉や会話があふれた社会になっていくとよいですね。

令和6年6月1日